

京都の社寺・庭園境内の敷地利用について*

地形的分析による空間評価

A Study of Site Use in Precincts of Shrine, Temple and Garden, in Kyoto

-Space evaluation by geographical feature-analysis-

江守 央¹⁾・伊澤 岬²⁾・山本 和清³⁾・氷室 正義⁴⁾

By Hisashi EMORI¹⁾・Misaki IZAWA²⁾・Kazukiyo YAMAMOTO³⁾・Masayoshi HIMURO⁴⁾

1. 研究の目的

国土や都市における自然環境をこれまでの合理的・経済的空間利用の時代から、限られた資源を精神的空間としてとらえる時代といえる。その現象の一つに自然再生事業にうかがうことができる。本稿はこの「精神的空間」として京都に立地する社寺・庭園の境内を分析し、再生すべき方向性を伝統的な境内の空間利用に見出そうと言うものである。

本研究では京都の境内を対象に、地形を生かした空間利用を建物とオープンスペースとの関係によってとらえて、今後は空間評価法として発展させたい。

2. 研究の方法

1) 調査対象

京都の名所を示す都名所図会の現代版とも言うべき『図会京都名所100選』を基礎に抽出する。さらにこの100選に1994年世界遺産に選ばれた宇治上神社を加える。また景勝地としての嵐山・広沢の池を除いた99社寺・庭園などの境内を調査対象とする。この内訳は、施設別に寺院71件、神社21件、庭園その他7件。さらに立地する地域については、京都市を中心に、京都府下の宇治・長岡京・八幡市の3市、3郡部の4町、滋賀県大津市が含まれる(表-1)。

2) 分析方法

建物とオープンスペースとの関係を地形的特徴によってとらえるため、『丘陵地に建つキャンパスの計画的な研究』1980で提案した分析方法によって、境内の空間構成要素と地形との関係を設定した分析項目・細目で分析する(図-1、図-3)。

*キーワード：地形、境内、自然再生

¹⁾正員、工学、日本大学理工学部社会交通工学科

(千葉県船橋市習志野台7-24-1、TEL:047-469-5503、

E-mail:emori@trpt.cst.nihon-u.ac.jp)

²⁾正員、工博、日本大学理工学部社会交通工学科

(千葉県船橋市習志野台7-24-1、TEL:047-469-5503、

E-mail:izawa@trpt.cst.nihon-u.ac.jp)

³⁾正員、工修、日本大学理工学部海洋建築工学科

(千葉県船橋市習志野台7-24-1、TEL:047-469-5483、

E-mail:yamamoto@ocean.cst.nihon-u.ac.jp)

⁴⁾非会員、工学、(株)ラムラ(東京都中央区大伝馬町10-8、

TEL:03-3661-3662)

境内の空間構成は敷地を利用空間、未空間利用に大別し、利用空間をさらに各種建物、庭園、道路とに細分類する。各種建物は宗教系、観光系、庭園系など多様である。さらに未空間利用は良好な環境を保つ上でも重要な空間であるばかりでなく、神域や借景としての機能を有し、精神的な空間を特徴付ける重要な空間と言える。

以上の空間構成要素と地形との関連を高低差、勾配、地形形状によってとらえる。これは地形によって境内を全体的・部分的にとらえ、さらに総合的で空間的視点から地形形状によってとらえようとするものである。高低差は、都市計画地図・白地図(以下白地図)を基礎資料とし現況調査を踏まえ1mを単位として集計する。勾配は区域の勾配を測定する方法として方眼法を採用し、白地図を基に現地調査を踏まえ1mを単位に集計する。地形形状は空間的な指標として、境内の主要な空間構成要素の各種建物と庭園との相互位置関係を白地図の等高線によって類例化して4つの基本型「斜面」「山」「半島」「盆地」とさらに同じ型が繰返される「重複」と複数の型による「複合型」に分類しそれぞれの空間的特質を明らかとする。

3. 分析結果

1) 規模の特徴

10ha未満に66%、25ha未満に94%が分布。100ha以上が伏見、醍醐、延暦(1200ha)で延暦は特別なスケールといえる。以上幅広い分布で小規模な境内が多い。

2) 地理的特徴

都心からの距離は10km未満に81%、30km以上は笠置と浄瑠璃。アプローチ標高は峰定460mまでの幅広い分布となり、120m未満に85%で120m以上は15件(図-2)。

3) 地形的特徴

高低差：

敷地レベル差は延暦720mと幅広いが、100m未満に89%が分布。200m以上は醍醐、鞍馬、峰定、善峰、伏見、延暦の5件である(図-7)。

利用レベル差

建物間レベル差は20m未満に79%と集中傾向が見られ

た。100m以上は404m醍醐、鞍馬、伏見、峰定、延暦の5件である(図-8)。

アプローチレベル差は延暦552mと幅広いが、20m未満に85%と集中傾向が見られた。100m以上は延暦、鞍馬、善峰、峰定の4件である(図-9)。

最大利用レベル差は、20m未満に74%、40m未満では88%と集中傾向が見られた。100m以上は延暦、醍醐、鞍馬、伏見、善峰、峰定の6件(図-10)。

以上、各種利用レベル差における集中と、立地条件の違いによる敷地レベル差の幅広い分散がみられた。この分散は上下醍醐に分けられる醍醐寺、稻荷山を背後にもつ伏見稻荷、さらに観光ケーブルカーを持つ鞍馬寺など神的なスケールともいふべき値と考える。一方その集中の値からアプローチレベル差 建物間レベル差 の参詣空間としての人的スケールに基づく指標として20m、つまり建物約5階分の階高に相当する高低差、また最大利用レベル差 の指標として倍の40m、建物約10階分に相当する高低差が想定できる。以上 敷地レベル差 がいかに大きい値となっても 利用レベル差 としては、ある程度以上の値では計画上利用し難いことが考えられ、この20mと40mは人間の歩行距離と同様に高低差における人的スケールのもとづく限度を示す値と考える。

勾配：

敷地平均勾配10%で対象境内は分布上二分でき、アプローチ標高70mがこの10%の境界ともほぼ一致する。京都では敷地平均勾配10%が平坦地境内と丘陵地境内に分類の目安となると考える。因みに法観寺八坂の塔は60mである。人間行動の範囲を限定する最大利用レベル差40m以下87例について勾配との関連を見てみると敷地平均勾配がほぼ30%以内に分布し、この値によって中勾配と急勾配との境界の目安が見られる。さらに勾配の上限を階段の勾配から73%を想定する。因みに中勾配には11%の金閣寺、12%の東福寺が、吉田神社は28%で中勾配に、三千院35%が急勾配でケーブルカーのある鞍馬78%と峰定74%が上限値を越える。集計の結果、10%未満の緩勾配に43%、10%を超え30%以下の中勾配に31%、30%を越える急勾配に26%となった(図-5)。

建物敷地平均勾配 緩勾配に45%、中勾配に41%、急勾配に14%で、上限値を越える例は皆無である。以上勾配についても敷地平均勾配が高い値になっても利用勾配となる建物敷地平均勾配の値は集中傾向にある(図-6)。

地形形状：

境内の地形的特徴を敷地平均勾配10%以上について分析の結果、4つの基本型「斜面」27件「山」4件「半島」5件「盆地」12件で、「重複」2件、「複合型」7件である。「斜面」の好例として修学院が、「山」では笠置、石清水が、「半島」では光明、神護が「盆地」で高山、浄瑠璃が好例として抽出できた。「複合型」では「山」を中心に多面的な地形の魅力により象徴的な空間を抽出できた。具体的には神体山を有する上賀茂、修行の場としての山頂を避けて懸崖造りの建物を建てる笠置、祠による施設化の伏見、本格建築化の醍醐などである。また鞍馬では「盆地」に入れ子式に小「半島」が加わった「複合型」でいずれも多面的な地形の魅力を有する地形形状である。地形形状別に、建物利用状況を断面(丘頂部、斜面部、谷部)で分析すると、斜面型、盆地型は谷部利用が多く、利用レベル差、建物敷地平均勾配が低くなる傾向があり、山型、半島型は丘頂部利用が多く逆に高くなった(図-11)。

一方敷地平均勾配10%未満であっても桂離宮、平等院は建物自体が丘頂・斜面部による地形的機能を担い、この建物群によって盆地型を構成しているといえる。

4. おわりに

自然再生が求められている一方で、ノーマライゼーションの考えにより、各地で観光バリアフリー対応が進められている。これは境内における歴史的な環境変化の危機をも有している。これまで京都の境内では神仏分離令、近代化の象徴する南禅寺の琵琶湖疏水の水路閣建設、戦後のモータリゼーションとこれに伴う観光化による大規模な環境変化が進められたばかりでなく、排気ガスによる文化財への影響も重大な環境的問題点といえる。そこで今後、地形的特徴を踏まえた観光バリアフリー対応のあり方を示したい。また、戦後のモータリゼーションによる境内における地形変化について考察を加えたい。

野村勸教授、大川三雄氏の指導と、高田千種さんの協力に感謝致します。

参考文献

- 1、中村良夫・桑子敏雄「研ぎ澄ませ風景感覚1」P110-127 技報堂 1999
- 2、竹村俊則「図会 京都名所100選」 淡交社 1991
- 3、伊澤岬「丘陵地に建つキャンパスの計画的研究」(学位論文) 1980
- 4、樋口彦彦「日本の景観」 春秋社 1981
- 5、氷室正義「京都の社寺・庭園境内の地形的特徴について」(卒業論文) 2002

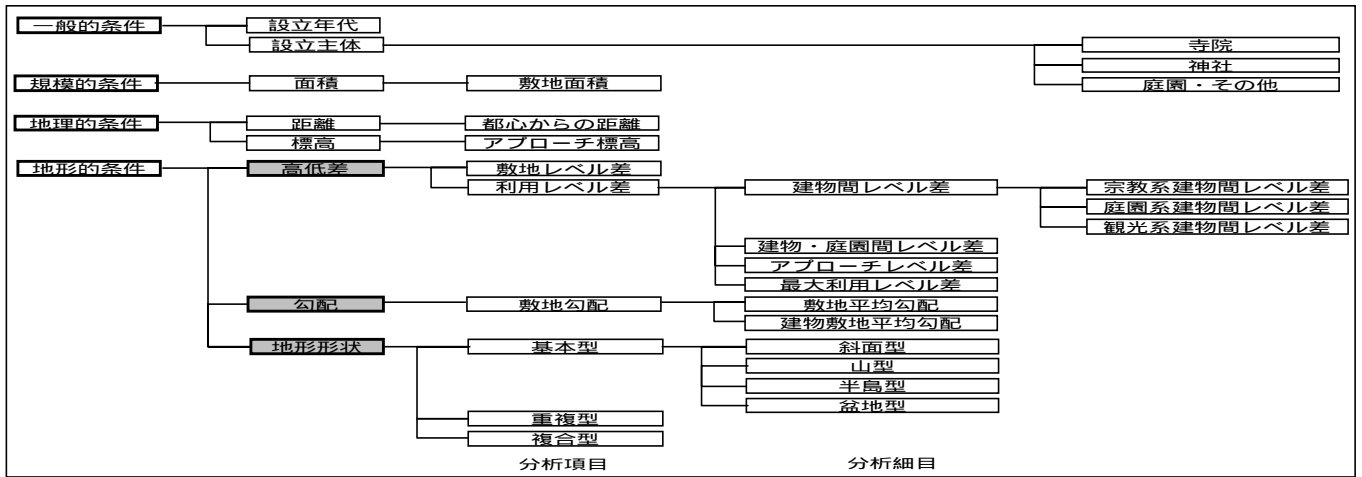


図 - 1 境内の分析項目・細目

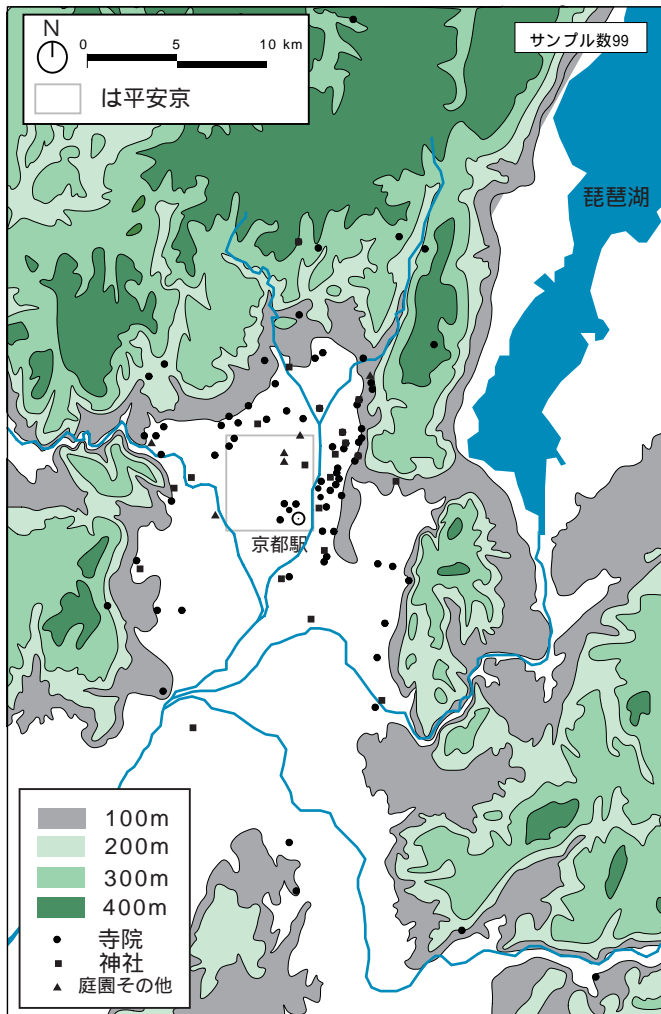


図 - 2 境内分布図

表 - 1 調査対象境内内訳

地域名	調査対象寺社庭園数			合計
	寺院	神社	庭園・その他	
京都市内	66	13	7	86
京都市外	10	2	0	12
京都府外	1	0	0	1
合計	77	15	7	99

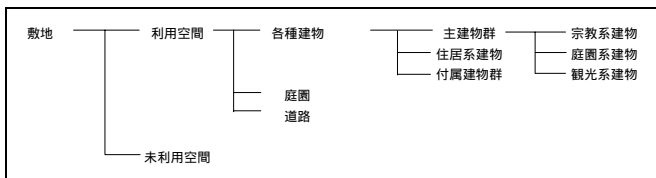


図 - 3 境内の空間構成

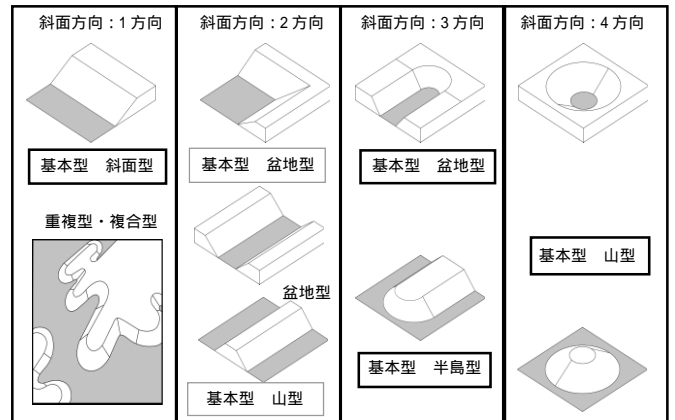


図 - 4 地形形状の基本型の抽出

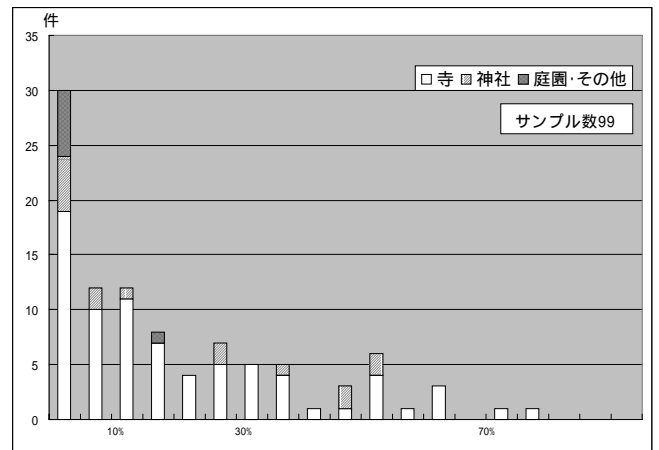


図 - 5 敷地平均勾配ヒストグラム

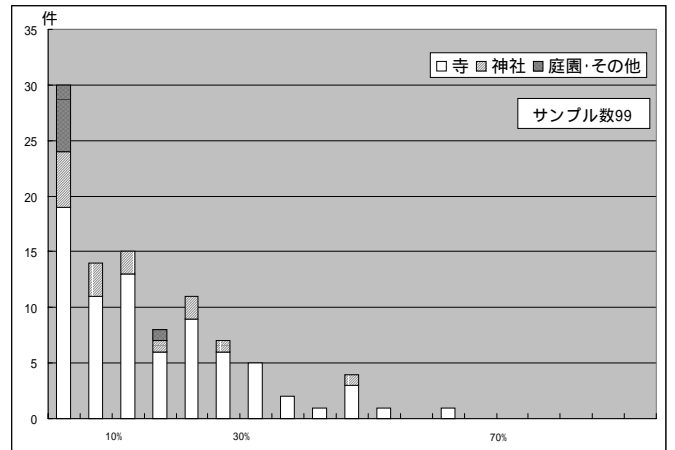


図 - 6 建物敷地平均勾配ヒストグラム

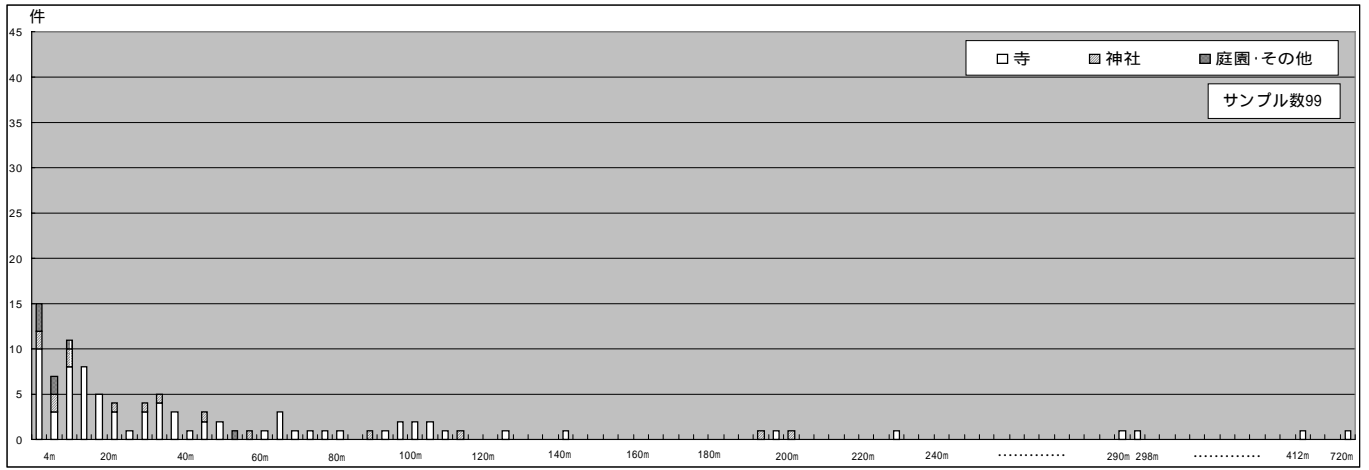


図 - 7 敷地レベル差ヒストグラム

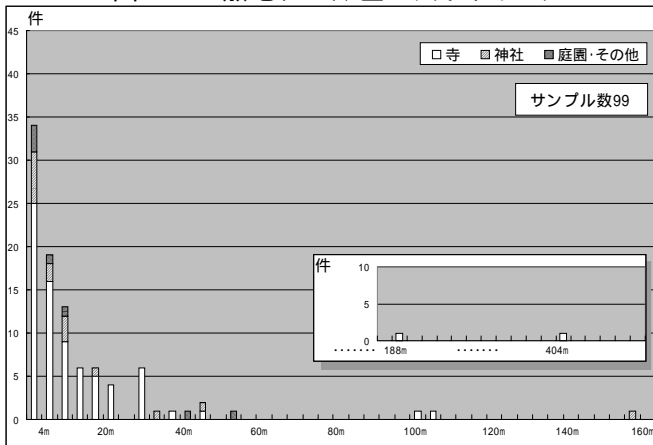


図 - 8 建物間レベル差ヒストグラム

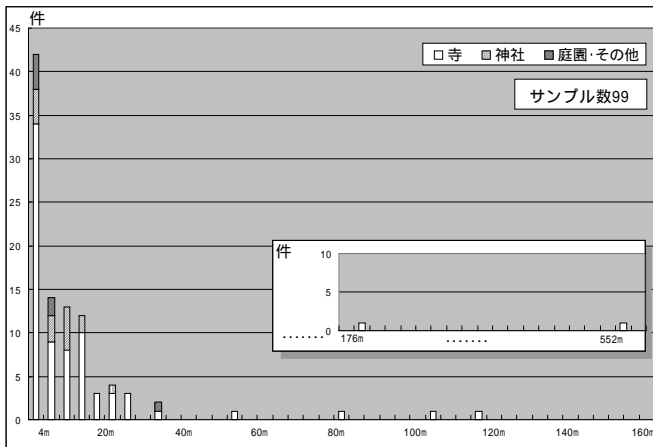


図 - 9 アプローチレベル差ヒストグラム

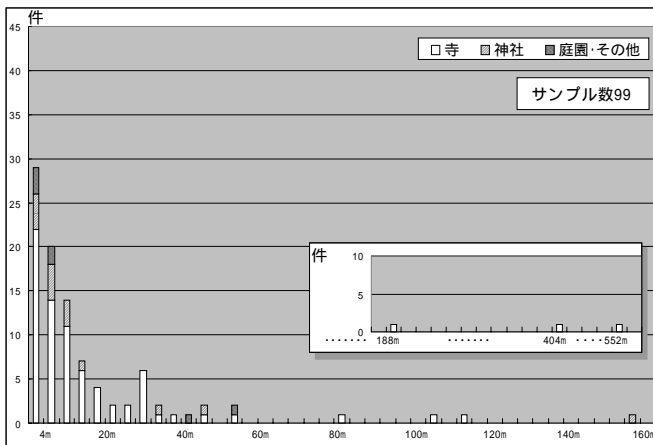


図 - 10 最大利用レベル差ヒストグラム

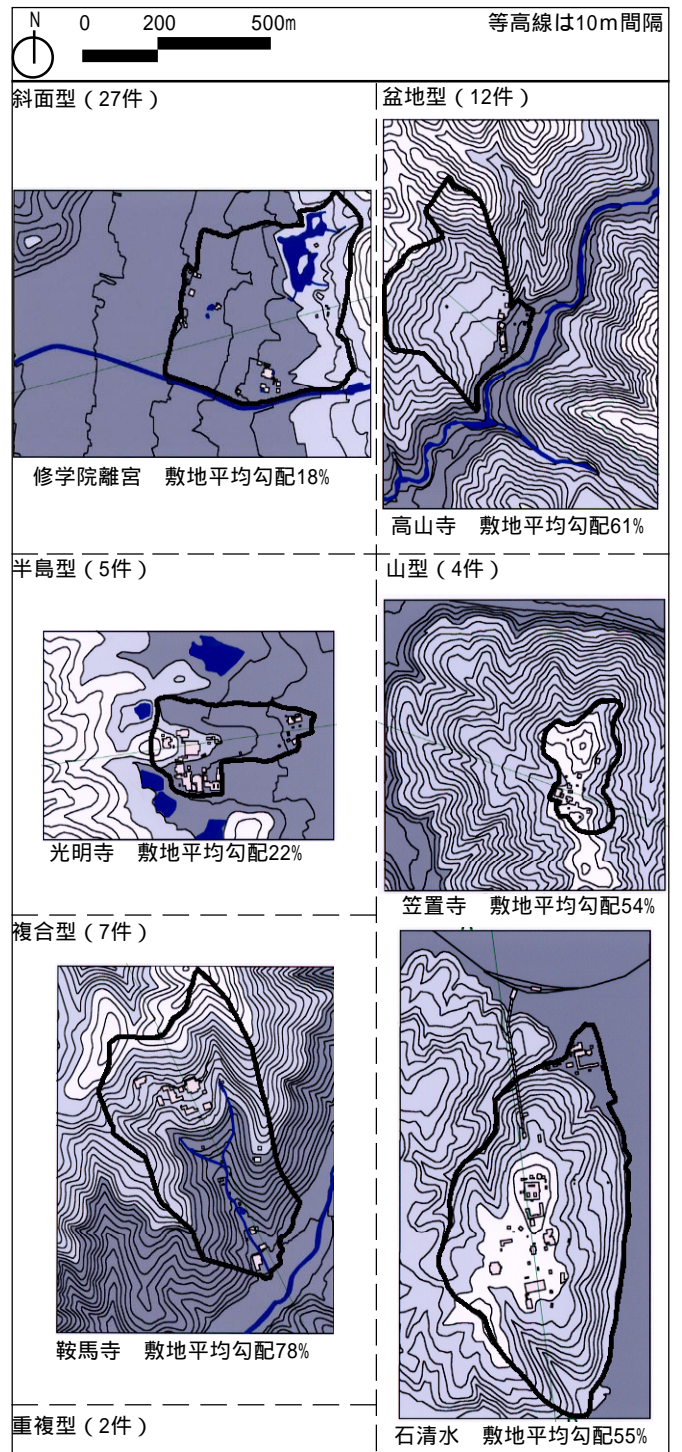


図 - 11 地形形状の分類 (サンプル57件)